

『国史談話会雑誌』 第五十号 別刷 (二〇一〇年)

東北大学文学研究科日本史研究室

スペインの対日戦略と家康・政宗の外交

平
川
新

スペインの対日戦略と家康・政宗の外交

平 川 新

はじめに

文禄元年（一五九二）から慶長三年（一五九八）まで、二度にわたって行なわれた豊臣秀吉による朝鮮出兵（文禄・慶長の役）は、東アジアの国際秩序に深刻な影響を及ぼし、朝鮮はもちろん中国とも断交状態になった。秀吉後の覇権を確立した家康の大きな課題は、東アジア外交の回復であった。アジア諸国およびヨーロッパ列強との多国間通商を模索した徳川政権の対外政策については多くの研究をもつが、本稿では主にスペインとの外交交渉に焦点をあて、スペイン側の対日本戦略、および徳川家康と伊達政宗の対スペイン交渉のあり方について検討しておきたい。

貿易とキリスト教布教を一体化（商教一致）して要求するスペイン側に対して、徳川政権は貿易と布教を分離すること

を求め続けた。慶長七年（一六〇二）九月、家康はフィリピン総督宛の親書で、来航船の保護とともに、キリスト教の布教を禁止することを伝えている。^①これとほぼ同時期の一六〇二年一〇月二二日、在日司教セルケイラはマニラのイエズス会に宛てた書翰に次のように書いていた。

「内府（家康）をはじめ異教徒の大名たちは、太閤と同様に、ルソンやメキシコのスペイン人は他國を侵略するものと固く信じている。サン・フェリーペ号の船員がいったように、布教は侵略の手段にすぎぬと思っている」と。^②

スペインが侵略的であり、布教はその手段だという情報は、秀吉の時代である慶長元年（一五九六）、土佐に漂着したスペイン船サン・フェリペ号乗組員が告白したとされている。もちろんこうした見方はそれ以前からあったが、スペイン人に選れて来日したオランダ人やイギリス人たちも、スベ

イン勢力を日本から排除させるためにスペインの侵略性をさらに吹聴した。

一五世紀以降、布教と一体化したスペインの世界領土拡張政策をみれば、セルケイラが書いた家康の懸念は当然でもあった。したがってフィリピン総督に対する布教禁止の通告は、たんに商教分離を明確にし経済的友好関係呼びかけたというだけではなく、布教と一体化したスペインの植民地政策が日本には通用しないことを警告する意義があったといってもよいだろう。

以下、あくまで商教一致にこだわるスペインの対日戦略の意図がどこにあったのかを明らかにすると共に、その戦略が破綻していった経緯と要因についてみていくことにしたい。

一 ロドリゴの日本征服構想

日本とスペインとの交渉が急速に進展するのは、慶長一年(一六〇九)、フィリピン諸島臨時総督の任を終えたドン・ロドリゴ・デ・ビベロがメキシコに帰還する途中、日本近海で遭難し、からくも房総半島に漂着してからのことである。嵐に遭ってマストを折られたロドリゴの船は、上総国岩和田付近で座礁。材木や板にすがりついて陸に達し、ようやくにして村人に助けられたが、乗組員約三七〇人余のうち五〇人が溺死したとい³う。

遭難者がロドリゴであることを知った將軍秀忠は、彼を江戸城で引見したが、ロドリゴは事実上の「皇帝」である家康との面会を要望し許される。駿府で家康の引見を受けるにあたってロドリゴは、自分を世界最強であるスペイン国王の大臣として遇するよう求めるなど、したたかであった。それは拜謁直後、家康の側近本多正純に、スペインとの友好、宣教師の保護のほかにオランダ人の追放を要請したことにもあらわれている。友好関係を誼い宣教師の保護を求めることはそれまでも繰り返されてきたことだが、一五六八年にスペイン国王に叛旗を翻し、独立運動を展開しているオランダ人を日本から追放するよう求めたのは初めてであった。

オランダ連邦共和国は一六〇二年、オランダ東インド会社を設立してアジアでの勢力拡大をはかった。スペインからすれば宗主権を否定されただけではなく、同国が築いてきたアジアの貿易利権も奪われそうになっていた。ロドリゴによるオランダ人追放の要請は、まさにスペインとオランダの熾烈な闘いが日本市場をめぐるでも展開したことを示すものである。

ロドリゴは本多正純に対して、オランダ人は海賊であるために保護すべきではないと申し入れたが、家康はすでにオランダ人に保護を約束しているとしてこれを拒否した。だが家康は、知らされたオランダ人の暴状は参考になったと述べた

という。前述のようにオランダやイギリスもスペインの侵略性を家康に伝えていたから、西洋列強は家康を味方に引き込むための情報戦を展開していたといつてよい。だが家康は、この段階ではいずれへも過度に傾斜せず、等距離外交をしようとしていたのである。

ところでロドリゴは、日本を「大王国」だと認識していた。彼は日本の印象を次のように書いている。

「日本には多くの都市があり、いずれも人口が多い。全国どこでも米・小麦・大麦を豊かに産出し、狩猟と漁業の収穫量もイスパニアに勝る。銀の鉱脈も多く、金の質はきわめてよい。」(『日本見聞録』一一二頁)

これに続けてロドリゴは、「このように広大にして繁栄する大王国に進入することはスペイン国王にとってきわめて有利なことだ。私が思うにこの地(日本)に欠けている唯一のことは陛下(スペイン国王)をその国王としていないことだ」と、臆面もなく記している。ロドリゴにとって日本は、ほかの弱小の「王国」とは異なつて、繁栄する「大王国」だった。心外なことは、その日本がスペイン国王の支配下にないことであつた。

だがロドリゴは、「武力による侵入の困難なること真に確實なり」と述べる。なぜなら、「住民多数にして、城郭堅固なるがゆえに」だからである。「新イスパニア(メキシコ)

土人の如く野蛮」であれば恐れることはないが、日本人は弓・矢・槍や刀剣を有し、長銃を巧妙に使う。しかも、スペイン人と同じように勇敢なだけでなく、議論と理解の能力においてもこれに劣ることはない、と。メキシコ先住民はいつも簡単に屈服させることができたが、日本人は知性もあり軍事力もあるので征服は困難だ、と認識していたのである。

こうしたロドリゴの日本観は、じつは秀吉時代までの日本観を大きく転換させたものであつた。高瀬弘一郎氏が明らかにしているように、秀吉がバテレン追放令を出したあとまでは、宣教師であれフィリピン総督であれ、彼らの多くは日本を武力征服の対象とみていたし、実際にスペイン軍の派兵を求めたこともあつた。しかしロドリゴは、武力征服は困難だと言っている。こうした日本認識の転換に、秀吉政権期における朝鮮出兵やルソンへの服属要求などが大きな影響を与えたであろうことは容易に推測できる。

フィリピン臨時総督を務めたロドリゴは、日本の軍事力の強大さと強硬的日本外交を痛感していたと思われるが、日本を征服するどころか、逆にマニラが日本によって征服されるのではないかとすら恐れていた。

「少数の日本人がマニラ市を陥落の危険に瀕せしめたることと三度なりしは、経験の証する所にして、今皇帝の怒または帝國を拡張せんとの野心より之をなさんとす。日本よりマニ

ラに至る航海は天候良好なれば十五日に過ぎず。皇帝もし命令を下さば五万人十万人を同市に派遣すること可能にして、之をなせば脆弱なる城壁内に在る五百のイスパニア人は多勢に抵抗すること能わざるべし」(同前一一八頁)

マニラが危機に瀕した三度の経験とは、日本人倭寇が襲撃したことを指すと思われるが、日本「皇帝」の命令でもっと大規模に攻撃されればマニラはひとたまりもないと考えていたのである。先にロドリゴは日本を「大王国」と呼んでいたが、ここでは「帝国」や「皇帝」と表現している。わがスペインですら「王国」や「国王」といつているにもかかわらず、日本に対してこうした表現が用いられているのは、軍事大国としての「帝国」日本、強大な実力をもつ日本「皇帝」、というイメージが投影されているのではないだろうか。

とはいえロドリゴは、日本征服をあきらめていたわけではなかった。彼は、こう語る。

「武力による侵入の困難なること、真に確実なりとすれば、我らの主なる神の開き給へる聖福音宣伝の途により、彼らをして陛下に仕ふることを喜ぶに至らしむるはか、選ぶべき途なし」(同前一一五頁)

要するに、まずはキリスト教化を進めることによって日本人の精神世界を掌握しようということである。さらに続けて、「キリスト教弘布し、キリシタンの数増加するに至らば、

現皇帝(家康)および他の皇帝(秀忠)死したる時は、新王は彼らを苦しむべきこと明らかなる者の中より選ぶことなく、陛下(スペイン国王)を挙げべしと考えられる」(同前一一六頁)と述べる。

キリスト教の「寛容・自愛」に感化された日本人は、徳川将軍家に代わってスペイン国王を日本国王に推戴するのであるという、きわめて樂觀的な見通しが語られている。ロドリゴは、日本の「諸王」は相続によってではなく選挙によって選ばれると書いているので(同前一一五頁)、キリスト教が浸透すればスペイン国王が選挙によって日本国王に選出されると期待しているのである。

だがロドリゴが本当に、日本の大名や将軍が選挙によって定立されると認識していたとは思われない。おそらく実力によってその地位を得ることは知っていたのではないだろうか。その点はともかく右の記述は、入信したキリシタン大名や一般のキリシタンらによって徳川将軍家が排斥され、スペイン国王が日本の国王に推戴されるという見通しを語っていることになる。だからこそキリスト教を布教するチャンス逃してはならない、というのがロドリゴの考えであった。

家康はロドリゴに、メキシコとの交易を開くだけではなく、鉾山技師の派遣も求めた。これに対してロドリゴは、採掘・精錬した銀についてスペイン側の取り分を多くよこせと

いうだけではなく、スペイン人鉱夫や官吏、あるいは常駐する司令官や大使のために司祭や宣教師を伴うことを認めるよう要求している。

だが、司祭や宣教師を滞在させる「真の目的」は、「鉱山またはその付近にあるイスパニア人の間に居住せしむるを名として、諸宗派の宣教師をこの地方に入れ、各地に散在して努力し、前に掲げたる収穫を納めしむる」という点にこそあった。「前に掲げたる収穫」とは、日本征服のことである。ロドリゴは「皇帝（家康）が新イスパニア（メキシコ）貿易開始を望むを好機會」とし、大量の宣教師を日本に送り込むとしたのである。まさしく布教を先兵として領土化をはかる戦略であった。

じつはロドリゴには、もうひとつのねらいがあった。彼はスペイン国王に、オランダと対抗するために日本の皇帝と親交を維持すべきだと上申している。その理由は、オランダ人が日本を拠点に東シナ海の制海権を掌握すると、スペインが支配するフィリピン諸島は孤立しかねないと心配したからであった。だからこそ家康の希望通りにメキシコとの通商を認め、それと引き替えにオランダ人を日本から追放させなければならぬ、というのである。

ロドリゴが推進しようとする日本との通商関係は、たんに日本征服の第一段階としてだけでなく、オランダとの対抗

関係からも不可欠な事業だったのである。

慶長一五年（一六一〇）、家康とロドリゴは、家康がスペイン国王とメキシコ総督に使者を派遣して通商交渉をおこなうことで合意した。ロドリゴはスペイン国王に対して、「頑迷固陋な「野蛮人」（家康のこと）が国王に書翰を送ることになったことについて、「新世界の門戸は此のごとくして開かれ、数年の内に陛下の領有に帰するを實地に見んことを神に於いて期待す」と書き送った。この通商交渉がスペインによる日本領有の第一歩になる、と自尊心をふくらませたのであった。同年六月、家康は船を用意して、滞日中のフランシスコ会布教長フライ・アロンソ・ムニョスを使者としてメキシコに派遣した。

二 ビスカイノの交渉

日本から使者として派遣されたムニョスは、家康と秀忠が出したスペイン宰相レルマ公宛ての親書を携えて、帰国するロドリゴとともに渡海した。兩人の親書には、フィリピン総督より黒船を派遣する旨の申し出があったので、日本のどの港に着岸してもよい、という内容が記されていた。ムニョスはメキシコに着くと、すぐにスペインに渡り、国王に日本との通商を請願した。

これとは別にメキシコ総督は、ロドリゴの送還に対する返

礼の使者を日本に派遣した。その任にあたったのが、セバスチャン・ビスカイノである。慶長一六年（一六一二）五月一日、浦賀に到着したビスカイノは、「当国とイスパニアとの交通貿易継続すれば神佑によって帰依者は増加し、神は悪魔の掌中より当国にある多数の靈魂を救い給うべきこと疑いな^①し」と、メキシコと日本の交易推進により日本のキリスト教化をめざす強い意欲を示していた。

慶長一六年（一六一二）五月二五日、家康に謁見したビスカイノは、家康がメキシコおよびルソンとの交易に前向きであることをみて、オランダと断交しなければスペインとの通商は実現しないと、初発から強気の条件を提示している。だがこれが暗転するのは、同年末に岡本大八事件が発覚してからであった。家康側近である本多正純の家臣岡本大八が、大名の有馬晴信から旧領回復運動資金を詐取した事件である。いずれもキリシタンであったことから、激怒した家康は同一七年にキリシタン取締りを強化し、江戸の教会などの破壊を命じたのであった。

それだけではなく、家康がビスカイノに託すべく慶長一七年（一六一二）六月付けで作成したメキシコ総督宛て返書では、これに追い打ちをかけるような文言が記されていた。

「我が国は神国なり。貴国の法ははなはだ異なるなり。我が国にその縁なし。布教すべからず。ただ商船来往して売買

の利潤、偏にこれを専らとすべし」^②。

これをみたビスカイノは、「キリシタンを保護する約束に相違し、我らの教えを喜ばずとしたためあり」と記している。この家康書翰はのちに、支倉常長をスペインに案内したソテロが、後述するように改竄して届けることになった。

通商を開き布教の条件を確保しようと思いついたビスカイノの眼前で、幕府によるキリスト教の取締りが急速に強化されはじめた。思惑が狂って憤懣やるかたないビスカイノは、「キリスト教を庇護せず地獄に向かつて道を急ぐ皇帝」、あるいは「キリシタンを迫害する悪皇帝に相当の報いを与えたまえ」と家康を罵っている。

慶長一七年（一六一二）八月、ビスカイノは怒りを抱いたまま帰国の途につくが、嵐に遭遇して船体が痛んだため浦賀に帰帆せざるをえなかった。ところが家康も秀忠も船の修復費を援助せず、冷遇した。イギリス人のウィリアム・アダムスやオランダ人たちが、布教を手段に世界を征服するスペインのやり方を家康に忠言していたし、キリスト教の布教にあくまでこだわるスペイン側の姿勢にも両人は愛想をつかしていたに違いない。彼らはもはや、スペインとの交易を断念するつもりだったのであろう。

三 政宗と家康の外交、ソテロの野望

1 政宗と家康の思惑

そこにあらわれたのが、奥州大名の伊達政宗であった。慶長一七年（一六一二）一二月、窮状を見かねた政宗はビスカイノに新造船の提供を申し出た。その前年の一〇月に政宗は、家康の許可を得て三陸沿岸調査にやってきたビスカイノと仙台で会っており、そのときにもみずから造船し、スペイン国王とメキシコ総督に使者を派遣したいと要望していた。奥州という不利な地の利のために南蛮貿易に出遅れていた政宗は、なんとか独自に交易ルートを開きたいと考えていたのである。ビスカイノの帰帆は、そこにめぐってきた千載一遇のチャンスであった。

政宗は家康の了解を取り付けて、新造船（サン・ファン・パウティスタ号と命名）をビスカイノに提供し、フランシスコ会宣教師のルイス・ソテロを案内人として家臣の支倉常長をスペイン国王およびローマ教皇への使節として派遣した。ソテロはまた、通商を求める家康と秀忠のメキシコ総督宛の親書も預かっている。とはいえ、なぜキリスト教の取締りに着手した家康と秀忠がソテロに親書を託したのだろうか。

帰国船の修復すら援助しなかった姿勢をみると、その段階

の家康と秀忠はメキシコとの貿易断念もやむなしと考えていたに違いない。だが、政宗が帰国船の提供を申し出たことによって、家康はなおメキシコとの貿易ルートの確保に期待をかけたのであろう。政宗が派遣する支倉常長の通商交渉が成功すれば、スペイン船が仙台領内に入港することになる。その一部を関東に寄港させることによって、家康もまたメキシコとの交易を実現することが可能になるからである。家康と秀忠がソテロに、商船の来航を求めるメキシコ総督宛ての親書を託したのは、こうした思惑があったからと考えるのが自然であろう。

一方、政宗は貿易実現のためには布教を容認せざるをえないと考えていた。スペイン国王とローマ教皇に宣教師の領内派遣を要請したのは、それがスペイン船誘致の切り札だったからである。しかし宣教師による派遣要請は、禁教化を進めている幕府の方針と対立することになる。家康が政宗による宣教師派遣要請を認めたのは、布教を伊達領内に限るという前提があったからであろう。

サン・ファン・パウティスタ号出帆前に政宗は、將軍秀忠を江戸幕邸に迎え、駿府の家康のもとにも伺候している。幕府の船手奉行向井忠勝とも密接に連絡をとった。政宗は家康の了解を取り付けたことで、安心して支倉常長を派遣することができた。家康もまた、政宗の交渉によって得るであろう

スペインとの通商を、関東にも引き込む可能性に期待できたのである。

こうして政宗と家康の思惑は一致した。だが、家康が支倉派遣を容認したのは、たんに貿易利権への魅力というだけではなかっただろう。まだ豊臣方が存在し、徳川政権の基盤が十分に確立していない状態でもあった。大名となった伊達政宗を徳川方に引きつけておくためには、政宗の要望を聞き入れざるをえないという、地政学上の判断もあったのではないだろうか。

2 ソテロの野望

日本側の思惑はそうであったとして、支倉常長をヨーロッパの旅に誘い出したソテロは何を考えていたのであるうか。

日本で冷遇され、怒りを抱いてメキシコに戻ったビスカイノは、すぐにスペイン国王に書翰を出し、日本と貿易をすることに強く反対した。前述のようにビスカイノもロドリゴと同様に、布教による日本征服を構想していたが、その布教が実現できない以上、日本と貿易関係をもつことはスペイン側にとって何のメリットもないと考えていた。メキシコやマニラの商人たちの反対を押し切ってまで通商関係を開こうとしたのは、あくまで布教の条件を獲得するためであった。それが叶わない以上、もはや通商関係の樹立にこだわる必要はな

くなつたのである。

だが、ソテロの認識は異なっていた。ソテロはマニラやマカオの市場は日本との貿易に大きく依拠しており、もし日本を失えば存立できなくなると考えていた。そうならないためにも日本皇帝の要望に応じてメキシコとの通商を開くべきであり、もしこれに応じなければ日本はオランダやイギリスと同盟を結ぶことになるだろうと警告している（『大日本史料』七号）。

ソテロはだからこそ家康を説いて、メキシコ総督への親書をみずからに託すよう求めたのであろう。通商が実現すれば家康の禁教姿勢も緩和されると、という期待があったに違いない。禁教が強化されたので通商もやめるべしとするビスカイノとの違いがそこにあった。

ソテロの策士ぶりがあらわれているのは、伊達政宗を引き込んだことである。南蛮船を自領に誘致するためには布教の容認が不可欠だと考えていた政宗は、幕府がキリスト教取締りを強化し、多くの大名がそれに従いはじめていたにもかかわらず、伊達領では容教姿勢を貫いていた。そこに目をつけたソテロは政宗にスペイン国王への使節派遣を勧めた。もちろん政宗は即座にそれに応じ、帰国の途を失っていたビスカイノに新造船提供を申し出るとともに、支倉常長の派遣を決めたのである。

ソテロには、もうひとつ二段構えの戦略があった。それが徳川に代わる、伊達政宗「皇帝」作戦であった。支倉を引き連れたソテロは、メキシコ総督、スペイン宰相レルマ公、ローマ教皇らに対して、政宗が「次の皇帝」になると、しきりにアピールしたのである。

たとえば一六一四年九月、スペイン宰相レルマ公に宛てた書翰では、「この王（奥州の王）は日本の最も強大なる王の一人にして、現時の治者に次いで帝位に上がるべき人なりとは一般に考えるところなり」と書いている（同前四二号）。また一六一五年一月七日のローマ教皇の謁見式においてもソテロは、「大使の主君は遠からずして日本皇帝の位に即くべきものなり」と紹介した（同前一八号）。ソテロのアピールを信じた枢密会議もスペイン国王に対して、「現皇帝の死後、帝位にあがるべき望みあり」と記し、政宗が皇帝になれば「布教のため大なる便宜あるべし」と奏上している（同前一九三号）。

現皇帝の徳川をも追い落とす勢いをもつとされる伊達政宗。その政宗が宣教師の派遣を求めているのであるから、「次の皇帝」への期待が高まるのは当然かもしれない。それこそソテロのねらいであった。しかもソテロにとってそれは、たんなる期待ではなかった。一六一八年二月三日、ソテロはインディアス顧問会議議長サリーナスに次のように書き

送っている。

「政宗は、日本のキリスト教徒の数甚だ多くして三〇万人を越え、またキリスト教徒はその君に忠義なることを知れるがゆえに、その臣下のキリスト教徒たらんことを欲し、またみずからキリスト教徒となり、帝国内のキリスト教徒にして、迫害せられたるもの、彼を奉ずるに至ればこれを率いて皇帝を攻め、永く帝国を領せんことを望めり」（同前二〇一号）。

あたかも政宗自身がキリスト教徒になり、日本のキリスト教徒の支援をうけて現皇帝（徳川將軍）を攻撃することを考えているかのような書き方をしている。だが別稿で述べたように、当時の国内状況は政宗の謀反が可能な状況ではなかったし、政宗自身もまた徳川家への臣従を明確に表明していた。したがってこの文章は、ソテロの限らない願望が込められたものだといつてよいだろう。

ロドリゴにしてもビスカイノにしても、圧倒的な軍事力をもつ日本を武力的に征服することの困難さを痛感し、まずは布教によって信徒を増やし、その支援をうけて政治支配を確立するという、二段階征服論を構想していた。ソテロも基本的には同様であったが、彼の計画の特異さは、メキシコとの貿易を餌に有力大名である政宗をキリスト教徒に改宗させ、しかも三〇万人に及ぶとされる日本人キリスト教徒に政宗を支

援させて、布教を禁止した現皇帝を打倒する、という点にあった。いわば信徒政宗を動かして、内側から日本を転覆させる計画であった。

ソテロがひとかたならぬ策士であるのは、政宗がいかにキリシタンから信望を得ているかについて、キリシタン自身に証言させたことである。支倉常長がローマ教皇謁見を終えたあとの一六二五年一月一日、ソテロは三人の日本人キリシタンを伴って再び教皇に謁見しているが、彼らは日本人キリシタン四〇人が署名した願書を教皇に奉呈している（同前一三一号）。この四〇人は京都・伏見・大坂・堺の在住となつているため、「五畿内キリシタン願書」と称されている文書である。司教の増員や学院（コレジオ）設置の要望などが記されていた。だがそこにはなんと、伊達政宗を讃える文言も書き加えられていたのである。

「此人（政宗）、日本にて一番の大名、知恵ふかき人にて御座候へは、日本之主になり申とのとりさた御座候間、万ととのい申様、御おや様を奉願候」

驚くべきことに、政宗は日本で一番の大名であり、いずれ「日本之主」になると噂されている人物だ、と書いてあった。だからこそ「万ととのい申様」、つまり政宗の要望を入れてメキシコとの通商を開いてほしい、という願書になっている。

これまでの研究によれば、署名の筆跡が同一であるため

に、ソテロか、あるいはソテロに近い人物が作成したのではないかと指摘されている³³。たしかにそうなのだが、これをローマ教皇に奉呈したのは支倉とともに渡欧した三人の日本人キリシタンであった。彼ら三人は日本語で書かれた願書の内容を熟知していたはずなので、政宗に関するこの一文は彼らも了解したものであったといつてよい。その信徒たちもまた、政宗は次の「日本之主」だと証言したのであるから、ソテロが「次の皇帝」だという以上の説得力をもってバチカン関係者にはうけとめられたのではないだろうか。そもそも支倉使節に日本人キリシタンを同行させるといふアイデアがソテロの発案であったらうし、その同行日本人にこうした役回りをさせることも計算つくであつたに違いない。

なお、政宗は家康の禁教方針に反してスペインと同盟を結び、徳川への謀反を画策していたという見解がある。この日本人キリシタン問題もそれに関連した解釈を求められるが、彼ら三人は幕府に隠れてサン・ファン・パウティスタ号に乗船したわけではない。同号には、幕府船手奉行向井忠勝の家臣も一〇人ほど乗り込んだとある³⁴。向井配下の船大工も造船の段階から協力していたので、そもそも同号は伊達政宗と徳川幕府の共同派船だったといつてもよかつた。ということでは、キリシタンが支倉使節に同行することは幕府も認めていたということである。同様に、政宗がスペイン国王に提示し

た通商条約についても幕府承認のもとに進められたといつてよいだろう。場合によっては、日本人キリシタンが持参したこの「五畿内キリシタン願書」も、幕府筋が承知していたとみなすことができる。

以上のようなソテロの動きをみると、彼が家康および政宗に対する両面作戦を展開しようとしていたことが見えてくる。あらためて確認すれば次のようになる。

一つは、家康・秀忠の使者として通商交渉の成功を勝ち取り、布教に否定的な家康の姿勢転換を引き出すということである。宣教師招請文書を携えた支倉常長を引率するだけではなく、家康と秀忠のメキシコ総督宛の親書をソテロが持参することは、スペイン側にも大いなる期待を抱かせるだろう、というソテロなりの読みがあつたに違いない。

だがここで注意しなければならないことは、ソテロが家康の親書を改竄した可能性が高いということである。『増訂異国日記抄』を校訂した村上直次郎氏は、家康親書の日本文には存在するもののスペイン語訳からは削除されている文言がある、と指摘している。その削除された文言のなかに、次の一節が含まれていた。

「釈典曰、無縁衆生難度、於弘法志者可思而止、不可用之、只商舶来往而売買之利潤、偏可專之」

これについて松田毅一氏は、「縁なき衆生は度し難し」と

いう文言は訳出がむずかしかつたかもしれないが、「弘法」すなわち布教はやめよとか、商船のみ来舶せよという文言は故意に記載しなかつたことが明らかと指摘している。その通りだと思われるが、注意すべきは次のビスカイノの言である。彼はこの家康親書をみて、「キリシタンを保護する約束に相違し、我らの教えを喜ばずとしたためあり」と書いていた。ビスカイノは日本語を理解できなかったから、訳文の作成をソテロとセバステイアン・デ・サン・ペドロらに依頼した。その訳文をみて彼は、「我らの教えを喜ばず」という文言、すなわち「弘法」をやめよということが書かれていることを知つたのであつた。

しかし、メキシコ総督に届けられた親書の翻訳文には、前掲したこのもつとも大事な部分が省略されていた。ということはソテロはビスカイノにみせた訳文からこの部分を削り、それをメキシコ総督に届けたということになる。ソテロが改竄したことは、ほぼ間違いないであろう。家康の意図は、スペイン側に正確に伝えられなかつたのである。あえてソテロの立場に立った言い方をすれば、改竄してまでもなんとか両国の通商を実現したかつたということであろう。ここでは詳論しないが、布教禁止の文言を削除した家康親書が届けられることによって、スペイン政府やローマ教皇庁には一種の混乱が生じることになった。

ところで、ソテロが目論んだ両面作戦のもう一つは、政宗に対してであった。もし仮に家康の布教禁止の姿勢が変わらなかつたとしても、伊達政宗との通商関係を樹立できれば、宣教師を引き続き日本に送り込むことが可能になる。しかもその政宗は「次の皇帝」として大いに期待できる人物であった。幕府が禁教政策を断行したので布教も通商も断念するというのではなく、逆に貿易実現によって政宗をキリスト教徒となることに誘い込み、彼が「次の皇帝」になることへの期待をつないだのである。そうすれば日本はスペイン国王の支配下にはいる、という戦略にはかならない。

ソテロはしばしば、みずからが日本の司教ポストを手に入れるために種々の画策をおこなったと評価されている。そうした見方も可能ではあるが、彼の言動をみると、布教が困難になりつつある日本に対して、いかにそれを継続させるかに腐心していたといつてよい。しかもそれは、スペインやポルトガルの宣教師や商人・総督らが等しく望んでいた、日本支配を実現するためでもあった。スペインとの通商を渴望する政宗に近づき、家康をも納得させて支倉使節を派遣させた力量には並々ならぬものがあるといふべきであらう。

四 破綻したスペイン側の対日戦略

ソテロが所属したスペイン系のフランシスコ会とポルトガ

ル系のイエズス会は、日本布教をめぐる対立することが多かった。そのためイエズス会やその関係者はソテロの動きに少なからぬ不快感を示したが、スペイン宰相レルマ公や枢密会議など、ソテロに同調した動きをとる人々も少なくなかつた。にもかかわらず、なぜソテロと支倉常長は、通商交渉に失敗したのだろうか。それは支倉渡欧中に、日本におけるキリスト教排除の情報が次々と到来してきたからである。

ロドリゴがメキシコに帰還したあとの一六二三年六月、スペイン国王は毎年船一隻をメキシコから日本へ派遣する旨の家康への返書を用意させていた（『大日本史料』二二〇号）。しかし、その返書を届ける予定の使者ムニョスの日本渡航が遅れているうちに、一六一四年三月、支倉常長がメキシコに到着した。その後、大西洋を渡って一六一五年一月三〇日、支倉はスペイン国王フェリーペ三世に拜謁して正式に通商協定を提案したのだが、それより少し前の一六一四年二月二三日、スペイン国王はメキシコ総督に宛てて、先に用意させていた家康宛の返書について、メキシコから一隻の船を派遣するという条項を削除すべし、と指示している（同前二一七号）。

支倉と一緒にサン・ファン・パウティスタ号に乗って帰国したビスカイノが、日本における禁教政策の進行を報告しただけではなく、在日宣教師たちからも同様の情報がスペイン

にもたらされてきたからである（同前四六号）。スペイン国王は一六一三年六月の返書にあった船一隻派遣の条文を修正させるにあたって、その理由を日本におけるキリスト教の状況が変ったからだとして述べている。

ソテロの言動に疑いをもたれていたことは、支倉たちがメキシコに到着した直後の一六一四年五月二二日、メキシコ総督からスペイン国王宛の書翰に早くもみえる（同前八号）。

「臣のみる所にては、ソテロは実直なる人物にあらず」として、日本との通商に関しては、「特に熟考を要することを感じたり」と報告している。これをうけた一六一四年一〇月三〇日のインディアス顧問会議からスペイン国王への奏議文では、ビスカイノやメキシコ総督から報告のあった日本の実情、および支倉常長とソテロ渡来の事情調査をおこなうことを報告している（同前四六号）。国王による条文の修正指示は、こうした動きをうけてのことであった。

ソテロに対する不信感は、その後も関係者に広がっていったようだ。一六一六年四月一七日、マドリッド駐在教皇大使がローマの貴族シビオーネ・ボルゲーゼ枢機卿に送った書翰には、次のようにある。

「このバードレに関して、閣下に隠匿すべからざる一事あり。即ち日を追うて不信を増し、その来使の趣旨に確実ならざるところを発見することとなり。日本の騒擾の報知も、ま

た耶蘇会の宣教師等より得たるところなり」（同前一七九号）

ソテロは日本における迫害の実情を隠しており、通商さえ開けば布教も可能になるとばかりアピールしているという不信感が広がっていたのである。ここには記されていないが、支倉が日本皇帝の使節ではなく、その支配下にある一国王の使者にすぎないことについての疑念も深まりつつあった。

かくして、ローマ教皇は、宣教師の日本派遣は認められたものの、通商関係についてはスペイン国王の判断に委ねるとした。これを受けてスペイン国王は一六一六年七月一二日、政宗宛の返書に、支倉使節を歓迎したこと、および宣教師とキリスト教徒を厚遇することを求める旨、したためた。そこでは通商の件について触れられることはなかった。またキリスト教の保護については「日本全国に君」（家康）にも伝えたのである。これは先に用意してあった家康への返書のことであろう（同前一八一号）。

同年六月四日のインディアス顧問会議のスペイン国王宛奏議文によれば、「陛下の臣民及び福音の宣教師の、その国に至るものに対して厚遇を与ふべしとの申し出を果たさば、これと親交を結ぶべき旨を述べべし」と述べられている（同前一八〇号）。要するに、日本においてキリスト教排除の動きが停止されれば通商にも応じる、ということである。

この考え方は、ソテロとは逆であった。ソテロは家康らの

禁教政策を転換させるためにこそ通商関係を開くことが必要だと考えていた。しかし、スペイン国王やインディアス顧問会議は、禁教政策が転換されることこそが通商関係を開く条件であるとの方針を採用したのであった。

一六一八年四月、メキシコからマニラに向かったサン・ファン・パウティスタ号には、失意の支倉常長とソテロのほか、フランシスコ会の宣教師八人が乗り込んでいた。ローマ教皇およびスペイン国王が許可を与えた宣教師たちであった。

マニラに着いた支倉とソテロは、フランシスコ会のガルベス神父に託して伊達政宗に連絡をとった。政宗はその情報を幕府の船手奉行向井忠勝に伝えている。支倉がマニラ発の船で長崎に帰国したのは元和六年（一六二〇）八月初め、仙台帰着は同月下旬のことである。ファン・ヒル氏は、一六二〇年にマニラに入港した「奥州王の船」がマカオから船載した商品を販売したという、マニラの関税記録を紹介している。支倉はこの船で帰国した可能性が高いが、興味深いのはこの「奥州王の船」がマカオとマニラでしっかりと交易をしていることである。政宗が南蛮貿易にかかわったことを示す貴重な記録でもある。

帰国した支倉から報告をうけた政宗は、幕府老中土井利勝に対して、スペインからの返書を託されたソテロが入国の許可を求めていると取りなしを求めた。幕府が入国の許可を出

したかどうかは定かではない。ただし、一六二四年一月二〇日にソテロがマニラからローマ教皇に宛てた書翰によれば、政宗が迎える船をマニラに派遣したが、ソテロは時のフィリピン総督に捕らえられて乗船できなかったと記している（同前二五四号）。これが正しいとすれば、幕府の許可を得た政宗が迎える船を出したということになる。なおフィリピン総督がソテロを逮捕したのは、スペイン国王の命令によるとされている（同前二五一号）。ソテロの日本渡航はかえって日本での迫害を強めることになる、と懸念したためであった。

その後一六二二年、ソテロはフィリピン発の中国船で薩摩に密航したが、捕らえられて長崎に送られた。伊達政宗家臣の石母田宗頼がソテロに宛てた書状の控によれば、幕府老中土井利勝にソテロが無事出国できるように依頼すると書かれている。だがソテロは、二年後の寛永元年（一六二四）に処刑された。ソテロはスペインからの返書を持参したと政宗に知らせていたが、それは政宗宛だけではなく家康および秀忠宛の返書も含まれていた可能性がある。それらの返書は残念ながら、いま確認することはできない。

おわりに

支倉常長一行がセビリヤに滞在中の一六一四年一月二二日、スペインの枢密会議は国王に奏議して曰く、「日本はは

なはだ遠くして到底これを征服する能わず。ただ温和手段に頼りてこれを服するよりほかに途なし」(『大日本史料』五一号)と。ここにいう「温和手段」とは布教のことである。枢密會議もまた、武力による日本征服が困難であるため、布教こそ征服の最大の手段であると認識していたことを示すものである。

支倉がローマを出発した翌日の一六一六年一月一九日、ローマ駐在ヴェネチア大使からヴェネチア大統領に宛てた書翰には、「イスパニア国王が彼の国を以て自領となさんとの希望あること、すでに明らかになれば、法王はこれに関して何もなすことを欲せざること」(同前一五九号)とある。スペイン国王が日本を征服する希望をもっていることが明言されており、ローマ教皇もそのことに干渉しない、という趣旨である。

こうした記録をみれば、日本を征服したいという欲望は、たんに前線にいる宣教師や商人たちだけでなく、国王以下、スペインの総意であったといってもよい。だが彼らに武力による征服をあきらめさせたのは、ロドリゴが述べていたように、当時の日本が軍事大国だったからである。

日本の戦国時代は、世界史との交差において二つの歴史的意義をもっている。一つは、分裂国家としての意義である。これは国家としての統一的意思の形成を困難にしていた。イ

エズス会の日本征服戦略は、有力大名の信徒化と、大名間争乱の画策であった。分裂国家だからこそ可能であった。二つ目は、戦国大名間の猛烈な軍拡競争体制としての意義である。列島全域が覇を競い合う戦時体制であり、大名間の軍拡競争は、鉄砲の増産を含めて、軍事力を最大規模にまで膨らあがらせていた。

分裂国家のままであれば、西洋列強が日本に食い込み日本を従属させるチャンスが継続したことになる。だが、豊臣秀吉と徳川家康による統一政権の樹立は、次の二つのことを可能にした。第一は、国家意志の一元化である。秀吉のバテレン追放令や徳川政権の禁教令は国家意志として発動された。第二は、軍事力の国家的集中である。秀吉の朝鮮出兵にみせた大動員体制は、これを典型的に示すものであった。徳川政権もまた、これをより強固に確立した。かくして日本は、強大な軍事大国となったのである。

こうした日本の情勢をうけてスペインは、武力征服を断念せざるをえなかった。代わって構想されたのは、布教による信徒獲得をテコにした政治支配であった。ロドリゴもビスカイノもソテロも、この戦略では共通していた。だがロドリゴの意図を継承して来日したビスカイノは、眼前で禁教が強化される事態を目撃して、貿易拒否はもちろん布教すら断念することを考えた。ところがソテロは、貿易を餌に伊達政宗を

信徒化させようとし、支倉常長の遣欧使節を実現させた。それだけではなくソテロは、日本人キリシタンに支援させて政宗を「次の皇帝」とする構想も抱いていた。

しかしスペイン国王は、あくまで布教を条件として貿易に応じる姿勢を崩さなかった。スペイン国王はソテロの対日戦略を容れなかった、ということである。一方、政宗にとって、宣教師の派遣だけでは何のメリットもなかった。貿易利権を伴ってこない宣教師は政宗にとって不要だった。それどころか、禁教化を強めている幕府に対しては、大きな爆弾を抱えているようなものであった。そうであるがゆえに、支倉が帰国して交渉が失敗したことを知ると、政宗は即座に禁教令を領内に布いたのであった。

その後、徳川政権はキリスト教を全面的に禁止し、スペイン・ポルトガルと断交するにいたった⁽²⁾。これとともに幕府は、スペインの襲撃に備えて沿岸防備体制を確立させた⁽³⁾。それは個別大名の軍事態勢から全国的国土防衛体制へと、軍事的な国家的再編を実現したことでもある。かくしてスペインによる日本征服構想は、武力征服だけではなく、布教による征服すらも実現不可能になった。

それと併行して徳川政権は、貿易を長崎へ集中させ国家的管理を強めた。西洋列強は、世界のいたるところで傍若無人に植民地化を進めて従属貿易を強いていたのだが、そうした

強い西洋列強に対して、なぜ日本ではこのような動きが可能だったのだろうか。それは、強い列強に対抗し凌駕するだけの軍事力を有していたからである。徳川政権は強大な軍事力を背景として、列強主導の植民地型貿易を排除し、日本主導型の貿易関係を構築することに成功したのであった。

このようにみてみると、戦国時代の軍拡競争で蓄積された強大な軍事力が、日本を西洋列強による植民地化の危機から救ったという解釈も可能になるであろう。

注

- (1) 『増訂異国日記抄』、駿南社、一九二九年、二五八頁。
- (2) 松田毅一『慶長遣欧使節』、朝文社、一九九二年、六〇頁。
- (3) ドン・ロドリゴ『日本見聞録』異国叢書復刻版、雄松堂書店、一九六六年、三頁。以下ロドリゴの動向については同書による。
- (4) ファン・ヒル『イダルゴとサムライ』一六一―一七世紀のイスパニアと日本』（法政大学出版局、二〇〇〇年）では、この部分を「武力をもってこの国を征服するのは非常に困難と心底思える」と訳している（二一七頁）。
- (5) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』、岩波書店、一九七七年。
- (6) 拙著『開国への道』（全集日本の歴史第十二巻、小学館）では、江戸時代の日本が西洋から「帝国」とみなされており、その淵源は戦国期に來日した宣教師や列強商人たちの日本認識にあることを論じている。
- (7) ドン・ロドリゴ前掲『日本見聞録』附録、第二号「協定条項」。

- (8) 『異国往復書翰集』、駿南社、一九二九年、九三〜九五頁。
- (9) ビスカイノ『金銀島探検報告』、雄松堂書店、一九二九年、二八頁。以下、ビスカイノの言動はこれによる。
- (10) 前掲『異国往復書翰集』、六四頁。
- (11) ビスカイノ前掲『金銀島探検報告』、一七六頁。
- (12) 『大日本史料』第十二編之十二、東京大学出版会、一九六七年。以下、同書所収史料は本文中に史料番号を記した。
- (13) 拙稿『慶長遣欧使節と徳川の外交』、『仙台市史特別編 慶長遣欧使節』所収、二〇一〇年。
- (14) 松田毅一前掲『慶長遣欧使節』、二六九頁以下。五野井隆史『支倉常長』、吉川弘文館、二〇〇三年、一六一頁以下。
- (15) 『伊達家治家記録』二、宝文堂、一九七三年、慶長一八年九月一五日条。
- (16) 前掲『増訂異国日記抄』、六四頁〜七五頁。
- (17) 松田毅一前掲『慶長遣欧使節』、一六八頁。
- (18) ビスカイノ前掲『金銀島探検報告』、一三九頁。
- (19) 五野井隆史前掲『支倉常長』、四〇頁。
- (20) 五野井隆史前掲『支倉常長』、二二四頁。
- (21) 同前、二二八頁。
- (22) フアン・ヒル前掲『イダルゴとサムライ』、四七〇〜四七三頁。
- (23) 『仙台市史 伊達政宗文書』3、二二三一―号。
- (24) 五野井隆史前掲『支倉常長』、二三六頁。
- (25) 天理大学図書館蔵石母田家文書
- (26) 西洋美術史の若桑みどり氏は、天正遣欧少年使節を対象にした歴史書『グアトラ・ラガツィ 天正少年使節と世界帝国』（集英社、二〇〇三年、二〇〇八年に集英社文庫に収録）において、「スペイン・ポルトガルには日本を征服する国力も意志もな

かったにもかかわらず、国民の愛国心に訴えて仮想の外敵を作り上げ、国民の心をひとつに引き絞った」と述べている（文庫版、下巻四四一頁）。スペインやポルトガルに侵略の意思はなかったとする見解は同氏以外にもしばしば見られるが、本論で検討したように、それは事実誤認だといふべきであろう。スペイン・ポルトガルに日本を征服する意志がなかったのではなく、征服したくてもできなかったという状況を適切に把握することが歴史認識として求められよう。

- (27) この断交については、清水有子「日本・スペイン断交（二六二四）の再検討」、『歴史学研究』八五三、二〇〇九年、がある。
- (28) 山本博文『鎖国と海禁の時代』、校倉書房、一九九五年。

